



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

主日の説教

今日のみことば

聖霊降臨の主日 C年 (2022年6月5日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 2章1—11節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章8—17節

福音朗読：ヨハネによる福音書 14章15—16、23b—26節

共同体に降る聖霊

三つの朗読から

第一朗読は『使徒言行録』から聖霊降臨の様子こうりんの箇所かしよです。先週の主の昇天の出来事たかまの後の様子かきゆつを伝える記述の中とにつぎのようにあります。「彼らは町に入ると、泊まっていた高間に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党ねっしんとうのシモン、ヤコブの子ユダであった。彼らはみな、婦人たちや、イエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、心を合わせてひたすらいの祈っていた」(1章13-14節)。このようにマリアさまと一緒にいっしょ祈るお弟子さんたちの姿が聖霊降臨の出来事ぜんていの前提としてあるのです。マリアさまを中心かみに祈るお弟子さんたちの様子をこころにとめておきたいものです。

そうしますと、第一朗読の冒頭ぼうとうのことばが生き生きとしてきます。「五旬祭の日ごじゆんさいが来て、一同が一つあつになって集まっていると」(2章1節)。一つあつに集まっていたのは祈るためだったのです。もともと五旬祭のお祭りは、小麦しゆうかくの収穫はつほの初穂をささげました。この祭りでは、イスラエル人はみな、神殿さんけいに参詣する義務ぎむがあったので「巡礼じゆんれいの祭り」まつとも呼ばれました。いわゆる「収穫感謝こうたいの祭」に加えて、後代のユダヤ教では、この日にシナイ山じっかいで十戒あたが与えられたという歴史いの意味みを与えて、律法記念日りつぽうとして守られていたようです。つまり、モーセの律法まも(十戒)がすべての民のために七十の言語たみで与えられた日げんごと考えたのです。そこで各国かんがに、各地ぶんさんに分散していたユダヤ人たちが聖地巡礼みやの「宮もうでみやをする日」でもあったといわれています。外では巡礼客が集まってきてごった返している。しかし、家の中、おそらく「高間」と呼ばれる二階の部屋では、お弟子さんたちがマリアさまと共に祈っていたのです。こういった場面まもの中で聖霊は降るのです。

今日の第二朗読には、「この霊によってわたしたちは、『アツバ、父よ』と呼ぶのです」(15節)とあります。聖霊がもたらす恵みめぐの最たるものは、イエスさまがそうであったと同じように神さまに対して

「父よ」と呼びかけられることです。しかも親しみをこめて「アッバ」と呼びかけられることです。「アッバ」は幼児語でした。子どもが信頼と親しさを込めて父親に呼びかけるときの言葉です。イエスさまが主の祈りを教えてくれたときも「父よ」(ルカ1章2節)で始まりました。おそらく、イエスさまは「アッバ」と呼びかけて祈り始めたのでしょうか。また、ゲッセマニの園での祈りもそうでした(マコ14章36節参照)。

「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」(ヨハ14章15節)と今日の福音朗読の冒頭にあります。また、「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」(23b節)ともあります。「守る」はギリシア語でテーレーオーですが、もともとの意味は「囚人たちを監視して見守る、見張る」だそうです。さらには「あることのために何かを保つ」の意味もあるそうです。そして、「教えなどを遵守する。守る」の意味もあります。今日のイエスさまのことは「わたしの掟を守る」、「わたしの言葉を守る」は、互いに愛しあいなさいというイエスさまの掟を遵守するという意味でも理解できますし、イエスさまの掟をこころに留めておく、保ち続けていくとも理解できると思います。しかし、掟は人を縛りつけるものではありませんし、救いの条件でもありません、ですから、今日の福音の箇所は、イエスさまからの呼びかけである互いに愛しあいなさいをこころの深いところに保ちながら、それを実行できるように生きていくということを指すのではないのでしょうか。そのために「父は別の弁護者」、すなわち聖霊を送ってくださるのです。

福音朗読の最後のことは「わたしが話したことをことごとく思い起こさせる」(26節)は、お弟子さんたちが忘れていたイエスさまが語ったことばを思い出していくという意味だけではなく、むしろイエスさまのことばと行いにこめられていた深い意味に気づいていくという意味でもあるでしょう。そうしますと、お弟子さんたちは聖霊の働きを通じて、イエスさまの想いを知るようになるのです。その想いとは「互いに愛しあいなさい」という掟にまとめることができます。こうして、お弟子さんたちはイエスさまの掟をこころに留めながら歩み始めるのです。

説教

マリアさまを中心に祈り続ける共同体の中に聖霊は降りました。このように聖霊は人々の「集い」の中に働かれるのです。ですから、聖霊は教会という「集い」におられます。聖霊のめぐみはたくさんあるでしょう。パウロも『ガラティアの信徒の手紙』で「霊の結ぶ実(むすみ)は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実」とまとめています(ガラ5章22節)。しかし、そのめぐみは共同体を通じて、一人ひとりに与えられます。共同体を離れたところで、自分の想いだけで聖霊のめぐみを願ったとしても、それは的外れなものになりかねません。逆に共同体のなかで聖霊のめぐみをいただくわけですから、「あのよりわたしは霊的に優れている」とか「わたしの方が聖霊のめぐみをたくさんもらった」と比べてはならないのです。